4. アニー S. ブゼル

4.1 生い立ち

Buzzell, Annie Syrena (1866.8.3-1936.2.5)

アニー S. ブゼルは、マサチューセッツ州ローウェル市に八人兄弟姉妹の二女として誕生した。父オリヴァー A. ブゼル(1835–1914)は、若くして農業に従事しながら近くの学校で教育を受け、やがて書店で働いた。その後資金を得て独立に至った。この間、1858年にアデレード L. メリルと結婚する。父は南北戦争(1861–1865)勃発に際して進んで入隊し、戦傷で除隊、製靴業、製薬業にも従事した。

1872年にブゼル一家はネブラスカ州に移住。父オリヴァーは農業、伝道事業に奔走した。その後牧師になり、多くの開拓伝道と教会設立に活躍し、州立外国伝道委員長にもなった。

4.2 日本へ

敬虔な信仰と熱心な開拓伝道の精神に燃える家庭でアニーは育てられた。四歳年上の姉ミニーも 1884 年秋に中国の汕頭(スワトウ)に宣教師として派遣され、三年間宣教活動に従事した。アニーは両親や姉の影響を強く受け、海外伝道を志すようになった。

高校卒業後、ギボンのネブラスカ・バプテスト神学校に入学したアニーは、卒業後六年間小学校教師として働いた。立派な実績を挙げ、将来を嘱望されていたが、彼女の志すところは、郷里の子弟教育ではなく海外伝道であった。

そして 1892(M25)年 4 月、二十六歳の時に WBFMSW の宣教師に任命された。同年 8 月に L.ミードが仙台に尚絅女学会を創立したばかりだった。アニーは、このミードを助けるため、女性宣教師として日本に派遣されることになった。10 月に米国を出港。11 月 14 日に横浜着、19 日に仙台に到着した。ミードの良き協力者として、アニーは尚絅の学校運営にあたった。

4.3 婚約破棄

ところでブゼルには婚約者がいた。将来は共に日本で伝道することを誓った青年であった。その婚約者がまだ神学校にいたので、ブゼルだけ先に来日したのである。しかし三、四年後、いつのまにか婚約指輪がはずされ、書斎に飾ってあった写真も見られなくなった。

彼女は婚約を破棄して、自分の結婚と家庭建設を断念したのである。そして、わが子を育てない代わりに、尚絅女学会そのものを自分の家庭のように思い、女学生と後述するバイブル・クラスのメンバーらを心から愛した。ゆえに多くの日本の青年男女から「師母」と慕われるに至ったのである。

4.4 ブゼルの教育

さて、ブゼルが1899年(M32)年に「尚絅女学校」の初代校長となった時、彼女は三十三歳であった。それまでもミードを助

けながら、女学会の初期の時代を多くの困難をかかえながら、新しい学校の教育と運営にあたってきたにちがいない。

ブゼルの女子教育に対する精神や情熱については、彼女が行なった授業内容を見ることが有効であろう。尚絅女学校は、1899(M32)年当時「文部省訓令第十二号」の条件を満たさなかったために「高等女学校」ではなく「各種学校」として出発したわけであるが、ブゼルたちはこの制度を逆に利用し、むしろ自由に、そして普通よりも高い水準で授業を展開したようである。主な担当科目について見てみよう。

(1) 聖書の授業

ブゼルの聖書担当時間数は非常に多かった。ブゼルは聖書の全貌を教えるだけでなく、キリスト教教義も教えた。当時生徒だった人々の証言には、「学校のまだ若い頃は、聖書の授業時間は非常に多くて、殆んど聖書学校の観があった」「先生の聖書の御講義は、時の学校にとりましては、骨とも髄とも云うべきものでございました。…尚絅女学校の教ふるあらゆる学課の中、先生の聖書の御講義は、全校に熱血となって注がれ、学校の生命となりました」とある。他にも多くの証言があり、ブゼルが聖書の授業にどれだけ心血を注いだかよく分かるだろう。

(2) 英語の授業

英語の授業時間数は週六時間。当時の日本の義務教育における英語教育の時間数を上回るものだった。ブゼルはここでも下級から上級に至るまで授業を担当し、上級生には詩文の暗唱を課していた。

“Good Book”という標題をつけたノートに英詩を清書させ、生徒たちが暗唱できるまで繰り返し朗唱させたようである。そのとき意味が分からなくても、それらの詩が生涯の心の糧になることを確信していたからであろう。

(3) 音楽に対する態度

ブゼルは音楽の授業にも力を入れた。その頃仙台に在住していたリディア・デニングの指導助言を受けながら、音楽専門の学校でもないのに、彼女は音楽理論を厳格に教えた。正規の授業以外にもオルガンの個人教授、英語の讃美歌による合唱指導なども行った。

ブゼルの音楽に対する態度は、これを一つの独立した芸術として研究したり教えたりするのではなく、「神に対する礼賛の表現」であるという理解に基づくものであった。ブゼルにとって宗教と音楽は、共に手を携えて歩み行くべきものだったのである。

(4) その他の授業

この他にも、ブゼルは育児法も教えた。育児法といってもその内容は極めて広く、性教育、人体生理、婦人生理、処女の尊厳、女性の権威、理想の女性像、恋愛の秘義、結婚の原理、家庭生活の理想、母性愛などまで盛り込まれていた。

生徒は半ば驚異、半ば好奇心を以ってこれを迎へつつも、先生の謹厳な態度の中にも慈母の如き温情籠もれる言葉に、誰一人浮ついた気分を起す者なく、皆真面目に講義を聞くのであった。

栗原基『ブゼル先生伝』大空社 1992 年 P.201

その他ブゼルは編物なども教え、週二十八時間の授業を行っていたと記録されている。

(５) ブゼルの夏休み

6 月下旬から 7 月上旬にかけて行われる一学期の試験が終われば、生徒にとっては待ちに待った夏期休暇である。しかし、ブゼル校長はその夏期休暇を利用して、生徒や信者の家庭訪問を始め、その他傷病兵や病人を次々と見舞った。

ブゼルはこれを「御年始」と言った。しかしそれは儀式ばったものではなく、各家庭の個人個人にやさしく接し、心からの同情と労わりを示すものであった。また、手作りのグレープ・ジュースや 西洋菓子などをいつも持参した。したがって、彼女を迎える側も喜んで迎え、また一家を挙げてその訪問を楽しみにしていたようである。

ただ、この時期の外国人教師は、それぞれ避暑地保養地に休暇を取りに行くのに対し、ブゼル校長だけはいつも校内に留まって手紙書きや訪問をするので、それをよく思わない教師たちもいたに違いない。

(6) 同窓生への言葉

ところで、ブゼルたちが教えた尚絅の生徒たちは毎年どれくらいいたのであろうか。そして卒業生は何人だったのだろうか。

『尚絅女学院 100 年史』によれば、「1903 年(明治 36 年)、第六回の卒業生は九名に達し、卒業生の総数は 20 名となった」とあり、同年６月に同窓会発足式が行われている。

この同窓生たちに向けて書かれたブゼルの手紙が、1907(M40)年 12 月に創刊された同窓会の機関誌「むつみのくさり」創刊号に掲載されている。この年は尚絅創立十五周年で、11 月に祝賀会が行われた直後の刊行であった。このブゼルの文章、特に見出しにある“Be good”という言葉が、その後代々尚絅の同窓生たちを力づけ、そればかりでなく尚絅の教育の根本を指し示す言葉として今も大事に読まれ続けている。

ブゼルのメッセージ

“Be good”

…It makes no difference whether we are rich or poor, – we can be good, no matter whether we hold high positions, or work quietly in some lowly corner, – if we are good, the world will be better for our being in it. Only a few can be rich, or great, or learned, but we can all be good. So again I repeat my simple message to each one of you, – “Be a good girl, and God will bless you, and make you a blessing to the world.”

尚絅学院同窓会編『むつみのくさり』1907(M40)年創刊号掲載英文メッセージ（抜粋）

> 私たちは金持ちであろうと貧乏であろうと、高い地位にいようと目立たぬ片隅で静かに働いていようとどうという違いはありません。しかし、私たちが good である時、世界ははじめて私たちの存在によって、良き所になるのです。金持ちや偉大な人物や学識の人になれる者はごくわずかでしょう。しかし私たちは誰でも良き人になることはできます。あなた方一人一人にもう一度私のシンプルなメッセージをくりかえしたいと思います。良い娘でありなさい。そうすれば神はあなたを祝福し、あなたを世の恵みにしてくださるでしょう。
> （下線筆者）

世間ではどんなに目立たぬ存在あろうと「私たちが good である時、世界ははじめて私たちの存在によって、良き所となるのです。」”Be a good girl, and God will bless you and make you a blessing to the world.”とは、まさに他者のために生き、全ての栄光を神に帰したブゼルの人生そのものだったと言ってよいだろう。

『ブゼル先生伝』を題材にした創作劇「Goodness -ブゼル先生伝」が、尚絅学院創立百二十周年記念事業として、2012(H24)年 8 月に上演された。

他にも、ブゼル校長は卒業式の式辞などに生徒たちに次のように熱く語っている。

> 学校の人気のあるなしは、その学校の在学生や教師方によるものよりも、過半は学校を出た同窓生によるものであることを、皆さんは卒業証書と共に握って行って欲しいものです。

尚絅の教育の真価はまさに卒業生の存在と活躍にかかっていることを、ブゼルは確信していたに違いない。

わずか二十名で始まった同窓会であったが、卒業生数の増加とともに尚絅の同窓会は拡大の一途をたどり、物心両面から尚絅を支える役を果たしていった。今日でもブゼルやジェッシー（第二代校長、本資料第 9 章参照）の精神を受け継いだ同窓会の存在は大きく、尚絅の発展を見守りながら現在に至っている。

現在の同窓生数は、約 66,000 人である。また、全国には 15（内県外 6）の支部があり現在も活発に活動を続けている。

4.5 バイブル・クラス

ブゼルは尚絅女学校の中だけでなく、外でも忙しく働いた。市内の青年婦人会への指導、教会と自宅での讃美歌指導、十箇所以上の日曜学校の監督、セツルメント(settlement)と自営館(Jieikan)という貧しい人々が自営自活できるために作られた施設の管理・運営などである。中でもバイブル・クラス(聖書研究会)に集まった青年たちに対する感化は、その後大きな実を結ぶに至った。

(1) 成り立ち

当時二高に一人の生徒がいて、修学の必要上、学業の傍ら尚絅女学校で教鞭をとることになった。ある日、彼はブゼルに聖書を教えてほしいと希望した。これがバイブル・クラスの始まりである。1893(M26)年 4 月であった。

最初は、毎週日曜日の午後にブゼルの書斎で、一対一で始められた。その後、数名の青年学生が加わるようになって、ブゼルを中心にして聖書研究をするようになった。最後はいつも祈

祷をもって終えられた。

来日して間もないブゼルである。日本語も決して上手ではなかったはずである。つまり彼女は英語で、通訳なしで、バイブル・クラスを始めたということである。当然、学生たちは内容の理解もさることながら、英語の理解に苦労したに違いない。しかし、バイブル・クラス開始後一年間で、四名が信仰を告白してバプテスマを受けたという記録がある。彼女の人柄と熱意はその弊害を越えて彼らに大きな影響を与え、人間形成の貴重な手がかりとなっていったのである。

(2) 「火のバプテスマ」

1897(M30)年、ブゼルは米国に帰るか、仙台に残るかの決断をしなければならなかった。真剣な祈りの末、日本伝道の為に一生を捧げる決心をした。『ブゼル先生伝』では、遂にブゼル先生は「火のバプテスマ」を受けられたと記されている。その結果バイブル・クラスは一層の活気を呈した。

中でも 1898(M31)年は、バイブル・クラスの歴史の中で一番飛躍した年であった。土曜日夜のバイブル・クラスだけでなく、日曜日午後にも学びの時をもつようになり、火曜日午後には祈祷会が行われるようになった。そして、そこから受洗者が次々に起こされた。内ヶ崎作三郎、島地雷夢、吉野作造の三名は、1898(M31)年 7 月 3 日に仙台第一浸礼教会(現在の仙台ホサナ教会)で中島力三郎牧師からバプテスマを受けた。

このバイブル・クラスはブゼルの三回目の帰米となる 1919(T8)年 7 月まで二十七年間にわたり連綿と継続された。

(3) 近代日本文化史に遺る逸材の輩出

1897 (M30) 年のバイブル・クラスメンバー

後列：左から伊藤宅治、守屋孝蔵、木幡富治、土井亀之助、栗原基
中列：左から内ヶ崎作三郎、井上元成、A.S.ブゼル、吉野作造、中島祐、小西重直
前列：左から渡邊幸次郎、島地雷夢、平塚廣義、神谷健夫

主要メンバー
栗原基(1876–1967)第三高等学校 (京都大) 教授、戦後尚絅学院短期大学で教えた。**島地雷夢** (1879–1914) 島地黙雷の息子、神戸一中で矢内原忠雄を教える。**内ヶ崎作三郎** (1877–1947) 早稲田大学教授、衆議院副議長、国際連盟協会理事。**吉野作造** (1878–1933) 東京大学教授、大正デモクラシーの思想的指導者。**小西重直** (1875–1948) 京都大学総長。**佐藤清** (1885–1960) 英文学者、N.ホーソンの『緋文字』を翻訳した。

バイブル・クラスのメンバーは二高の学生たちだった。彼らの多くは東大に進学し、「東京帝国大学基督教青年会」のリー

ダーや中心的メンバーとして活躍した。東大卒業後は、牧師、大学教授、国会議員などになり、その後の日本の近代化に影響を与えた人物も少なくなかった。中でも吉野作造は、政治学者として東京帝国大学教授となり、日本の大正デモクラシー運動の思想的指導者となったのは誰もが知るところである。(第 7 章参照)

このように数多くの逸材を輩出してきたブゼルのバイブル・クラスのことを、ある人は「熊本バンド」「横浜バンド」「札幌バンド」に続く「仙台バンド」と呼んでいるが、そう言って差し支えないだろう。

仙台バンド

島地雷夢君の場合

島地雷夢の父島地黙雷師(1838–1911)は浄土真宗本願寺派の勧学として、仏教界に盛名を馳せていた。自分の後継者となるべき息子がキリスト教に改心したことで、「もし改心して再び仏門に入らなければ、父子とも死ぬ以外にない」と迫った。

島地雷夢は大学卒業後、病にかかり、神戸一中の教諭となり倫理の授業を担当し好評だった。1915(T4)年 2 月 9 日に三十七歳で死亡。告別式で、黙雷の養子である島地大等が現れ、「兄は永い間迷っていましたが、眠る時は父の許に参りますと申しました」と挨拶し、父の墓に合わせ葬られた。

島地黙雷師
(1838–1911)

東北大飢饉と米国からの救済

1905(M38)年に起きた冷害(宮城県地方が最悪で平年比 19%の収穫)による東北の危機的な飢餓状況に対し、ブゼルをはじめとする仙台在住の宣教師たちは、1906(M39)年ウィリアム・アクスリング牧師を本国に代表として送り、超教派の救済活動団体 "THE FOREIGN COMMITTEE OF RELIEF FOR THE FAMINE IN NORTH JAPAN" を結成し、東北救済のための寄付をアメリカ国内で募った。

4.6 奮闘と妬み

ブゼルの生活はいつも仕事中心であった。休日も平日と変わらず、夏も冬も働き通した。彼女は、WBFMSW から支給される一定の給料以外に、余計な経費を請求しないことにしていた。継ぎ接ぎの靴下を履いたり、自分は出来るだけ節約したりして、少しでも貧しい学生の志を遂げさせたいと援助を惜しまなかったようである。したがって、時には旅費に事欠いたり、大事な時に着る晴れ着がなかったり、日光、有馬、鎌倉などで開かれる宣教師会議に出席しないこともあったという。多くの外国人宣教師が猛暑を避けて向かった避暑地の軽井沢にも行かなかったようである。

ブゼルのこのような態度は、当然同労の宣教師や日本人の教師たちにも心地良いものではなかったに違いない。出る釘は打たれる。正しい人がかえって苦労するのはよくあることである。ブゼルが同労者以上に日本人に親しく接し、骨身を惜しまず働き、潔癖すぎるほど質素な生活に甘んじたことが、将来非難を

受ける素地を作りつつあった。

そして、恐れていたことが起こった。あるとき、入院している一生徒を見舞った機会から、ブゼルは、数奇な運命に泣く人に親しく面会するようになった。その一身上の境遇に深く同情したブゼルは、彼を救おうと決心した。そして、その人を引き取り、骨身を惜しまず世話をしたのであった。その後、様々な困難な事情もあったが、彼にキリストの信仰と神にある平安を得させるまでにこぎつけた。

しかし、この事件を理由にして、ある教師たちはブゼルを仙台から追放しようと考えた。「先生が学校に頑張っている間は枕を高くして眠ることは出来ない」「一人の校長が永く学校に留まるのはよろしくない」「大学教育を受けたでなし、学殖の認めるものでなし、かかる人は学校草創の時代はともかく、尚絅の今日にあっては新陳代謝の法則によって善処すべき」などの議論が噴出した。いらぬ噂も流れたに違いない。

この間、尚絅では大きな記念行事が行なわれていた。1917(T6)年の創立二十五周年記念式と新校舎献堂式、そして、ブゼル先生在職二十五年祝賀会である。内容は大盛況で関係者は大満足だったようであるが、ブゼルの心中はいかばかりであったろうか。校長を巡るこのようなある種不安定な情勢は、ブゼルの 1919(T8)年の第三回帰米までの数年間続いた。そして、その後尚絅は大きく変わっていく。

**創立二十五周年記念式、新校舎献堂式、
及びブゼル先生在職二十五年祝賀会**

・音楽会

1917(T6)年11月21日晩に行われ、600人が参集。合唱、オルガン独奏、ピアノ連弾、独唱などがあり、最後に土井晩翠作詞、佐々木英作曲の新作校歌(本資料 p.55参照)が生徒一同によって歌われた。

・祈祷会

11月22日午前９時、新校舎が与えられたことに対する感謝と、この校舎を立派に使用できるように、生徒と教職員共に祈った。司会はブゼル。吉川一水とアキスリングが説教を行った。

・創立二十五年記念式ならびに新校舎献堂式

11月22日午後1時開始
奏楽
讃美歌
聖書朗読
祈祷
教育勅語奉読
君が代
建築報告
沿革の紹介　ブゼル
説教　アキスリング
献堂祈祷
献堂の歌

祝辞
校歌
祝祷

・ブゼル先生在職二十五年祝賀会
11月23日午前９時開始
讃美歌合唱
聖書朗読
祈祷
バイブル・クラスの教え子や各団体代表の祝辞
職員・同窓会・生徒代表の祝辞
記念品贈呈
答辞　ブゼル
※記念会発起人会は、この時、学校内にブゼル記念文庫を創設し、永くこれを保存することを報告した。

・バザー：11月23日午後から三日間に渡って行われた。
・女学生大会： 11月23日午後。
・同窓大会：11月24日午前。
いずれも大盛況を呈し、来会者は一同大満足であった。

東西バプテスト女性外国伝道協会の統合

エラ・オー・パトリックがかつて書記をしていた、尚絅女学校への独身女性宣教師派遣の母体、シカゴに拠点を持っていた西部バプテスト女性外国伝道協会(Woman's Baptist Foreign Missionary Society of the West, WBFMSW) は、東部マサチューセッツに拠点を持つバプテスト女性外国伝道協会(Woman's Baptist Foreign Missionary Society, WBFMS)と統合され、1913(T2)年、アメリカン・バプテスト女性外国伝道協会(Woman's American Baptist Foreign Mission Society, WABFMS)となった。

4.7 第三回目の帰米

宣教師たちは、数年に一度は休暇帰国することになっていた。それは自分たちを派遣し経済的精神的に支えてくれている伝道協会や各教会に赴き宣教報告をするためである。この期間は休暇も兼ねているが、継続して支援を受けられるように、各教会を巡回することが重要な任務であった。

ブゼルは 1919(T8)年 7 月に第三回目の帰米のため仙台を離れた。しかし帰国の途についたのは、同年 8 月に尚絅女学校に退職届を出してからであった。

第三回帰米
1919.7－1920.12

この間、尚絅の主事として働いていた千葉勇五郎氏は、秘かに米国に手紙を書いた。その内容は、仙台の情勢がブゼルにとってよくないこと、次回来日したときは仙台以外の伝道地を選択するのがむしろ賢明であるというものであった。

ブゼルの帰米後、尚絅では記念図書館にあったブゼルの写真が取りおろされ、どこかに打ち捨てられたという事件が起こった。ブゼル自身も予想しないことであった。

翌年 1920(T9)年 12 月にブゼルは再び来日した。横浜や東京では歓迎会まで催された。しかし、仙台に入り久しぶりに尚絅の校舎に入ったときは「針の筵に坐る心地であった」と栗原は書いている。

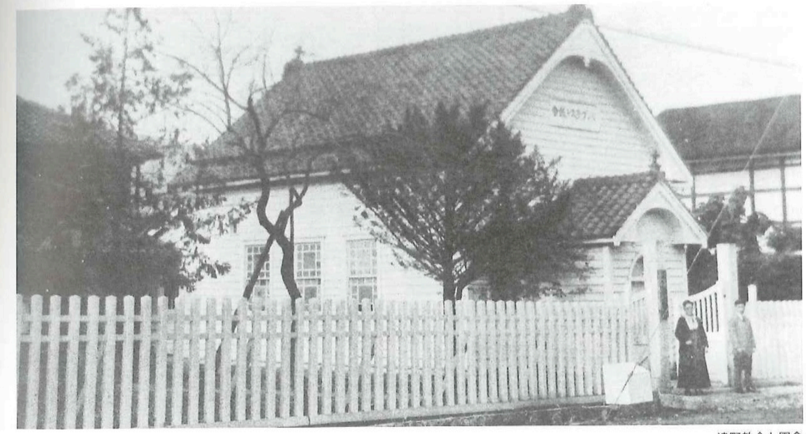
栗原基『前掲書』p.457

その後、二、三日は仙台に滞在したようであるが、ブゼルは懐かしい仙台に別れを告げ、急いで新しい赴任地である岩手県遠野へ向かった。花巻から当時ベビー・トレインと呼ばれた軽便鉄道に揺られながら三時間かかってようやく遠野に到着した。どんな思いでブゼルは尚絅と仙台をあとにしたのであろうか。当時のブゼルの心境を知る手がかりとして、遠野赴任後に山田光秀牧師(仙台浸礼教会)に宛てた手紙がある。そこには次のように書かれている。

ここに来て私は誠に仕合せで感謝に溢れて居ります。…ここでは暖かき歓迎を受けました。（1920.12.26）

今から後、私が日本、特に長年心を尽くして愛した都・仙台に帰ってからなめた苦難はことごとく忘れるつもりでおります。私は仙台を愛します。私はその教会を愛します。私は尚絅を愛します。そして毎日御一同のために祈りましょう。（1921.1.24）

4.8 遠野時代



遠野教会と園舎

遠野におけるキリスト教の伝道は、1892(M25)年 8 月から中島力三郎牧師によって始められていた。従って、ブゼルは遠野教会に迎えられた形になる。

彼女はさっそく町の東部にある穀町に、かなり大きな日本家屋を見つけ住まいとした。人口八千人の遠野における彼女の使命は、まず幼稚園を開設して、できるだけ早く教会に接続した建物を建てて、そこを遠野における伝道事業の中心地とすることだった。

ブゼルの赴任に伴い、仙台から庄司惣兵衛が同行していた。彼女の遠野での新しい伝道活動を支えてしばらく手伝うためだった。しかし、やがて家族を呼び寄せるまでになった。また、三宅はるという女性も幼稚園事業のために遠野までやってきた。そして、翌年の 1921(T10)年 4 月、遠野聖光幼稚園が遠野教会

内に開設された。ブゼルが遠野に赴任して三ヶ月後である。そして、その翌年 1922(T11)年 12 月 28 日、岩手県知事より幼稚園の認可を受けている。翌年からは英語学校、バイブル・クラス、家庭会なども始めている。

1922(T11)年認可前卒園生（遠野聖光幼稚園）

アメリカに宛てたブゼルの手紙

仏教の寺院と神道の神社は立派に保存されています。私たちは是非人目を引く立派なキリスト教事業中心部を設けたいのです。若き人々は両親の信奉したものよりも何かもっと宗教的に内容のあるものを欲しがっています。それ故私共が彼らにキリスト教を研究する機会を提供するのは、至って当然な事であります。

栗原基『前掲書』p.480

1921(T10)年 8 月 5 日付で故郷にいる妹ジェニーに送られた手紙

ブゼルは幼稚園の幼児を通して、遠野の家庭と両親とに呼びかけ、あらゆる社会層に光を当ててキリストを伝えていこうとした。幼稚園に行けない貧しい農家の子どもたちに対しては、1930(S5)年 7 月から下組町の水曜幼稚園を開設し運営した。

1929.5–1930.7 は帰米のため久慈のタマシン・アレンが園長を代行した。

彼らの働きは遠野の幼稚園から、農民を含めた遠野の住民の生活全部に接触し浸透していった。しかし、ブゼルは血圧が高く、還暦あたりから肥満になり、リウマチに悩むようになった。

遠野に移ってからも、ブゼルは仙台で世話をしていた学生に対する学資支援を継続していた。また、遠野での幼稚園を創設するにあたっても相当苦心していた。それはフローレンス・ハリス女史に宛てた手紙からよく分かる。もし故国にいる友人たちからの多大な経済的援助がなければ、ブゼルの遠野での活動は制約され実現しなかったであろう。栗原基は次のように書いている。

心血を注いだ書簡は次々に郷里に送られて、友人知己や教え子の日本に対する同情の念を涵養し、先生の聖業を分に応じて支援するに至ったことは、注意すべき事実であって、先生をして時に孤立無援の感あらしめている折柄、どれ程これが大きな慰安となり、奨励となって、歓喜と感謝に溢れさせたかは察するに余ある。其の間に先生の楽しき夢が次第に現実となりつつある。

栗原基『前掲書』p.495

4.9 晩年と永眠

ブゼルは日本永住を決意していた。山田牧師夫人に書いた手紙にも、「自分の亡骸を多くの愛する人々と共に北山に埋めてほしい」と伝えていた。

1926(T15)年 11 月 13 日に東京の三崎会館で還暦祝賀会が行われた時から、ブゼルが日本を永住の地とするのであれば、邸宅を造って差し上げようと言うことになった。宣教師は 65 歳定年。1929(S4)年の第四回目の帰米を最後に引退することは明らかだった。

1932(S7)年、ブゼルのために仙台に家を建てる提案が発起人の一人山田牧師からなされ、同窓生やその他教え子たちによる募金は直ちに目標額を突破した。1933(S8)年 12 月 3 日尚絅女学校講堂で仙台の新邸宅贈呈式が行われた。

しかし、遠野での事情はブゼルの仙台行きを簡単には許さなかった。ブゼルは頻繁に来仙するたびに新宅に宿泊し、なるべく人に迷惑をかけないように少しずつ荷物を運び入れた。「先生はなるべく人々に迷惑をかけないで済むように転住しようと注意されたのである」と栗原は『ブゼル先生伝』に書いている(p.604)。そして 1935(S10)年 7 月 24 日、ブゼルはやっと仙台に落ち着くことができた。

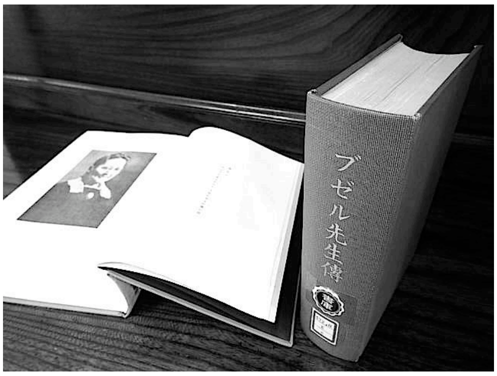
しかし翌 1936(S11)年 2 月 5 日、風邪により肺炎を併発し、皆が讃美歌を歌い祈祷する中、ブゼルは臨終した。

告別式は 1936(S11)年 2 月 8 日に尚絅女学校講堂で行われた。台湾や満州のような遠方から、またあらゆる階層から、五百から六百名が集まった。翌 9 日の日曜日には仙台浸礼教会で記念礼拝があり、午後は北山にある輪王寺の教会墓地に約百名が集まって埋葬式が行われた。

墓碑銘
わが父は今に至るまで働き給う、我もまた働くなり。
ヨハネ福音書 5:17

4.10 記念事業

その後まもなく尚絅女学校の安藤謙助校長を会長とするブゼル先生記念事業期成会が生まれ、次の三つの事業が計画された。

1）ブゼルの墓を立てること
2）ブゼルの胸像を造ること
3）ブゼルの伝記を出版すること

早速各事業は着手され、翌 1937(S12)年 11 月 23 日に自然石の墓碑が建てられた。翌 1938(S13)年 8 月 3 日のブゼルの誕生日には、遠野町の聖光幼稚園庭の前に胸像が立てられ除幕式が行なわれた。そして、1940(S15)年 11 月 23 日、栗原基著『ブゼル先生伝』(全 884 頁)が出版された。